

つたのだ。

足を組重ねて、靜座でもやるやうに息を長く吐いて、光明眞言を唱へた。

俺は立ち上つて又歩るき出したが、元來た道を後がへりしだしたのだ。

人家が戀しくなつたものと見える。

前の女の子のかゞんでゐた家の前邊りへいつのまにか戻つてゐた。

女の子は居なくなつてゐる。

見ると其の家の戸にも板戸が、二尺ばかり開いてゐて、中の電燈が往來まで明るく漏れてゐる。

俺は姦夫か盜賊のやうに覗き込んだ。

直ぐ其の板の間みたいな座敷に、夫婦が寝てゐるらしい。

亭主が目を覺ましてゐて、俺を見付けたものか、女房か娘の名を連呼した。

俺は土間へ這入つて行つた。

『オイ、火を焚いてくれ。』

此處の娘か、先刻起きてゐたのは』